

「心理的両性具有」の概念および測定法に関する文献展望

大澤 尚也

1. はじめに

ここ数十年の間に男女のジェンダー(社会的性)とセックス(雌雄の生物学的性)との区別が広まった。「自分が女である」、「自分は男でも女でもない」といった個人の性別に関するアイデンティティ(ジェンダー・アイデンティティ)、男女のジェンダーによる社会的期待に沿った行動(性役割)や、異性愛や同性愛、両性愛といった性的関心を抱く対象(性指向)についても区別して考えるべきことが示され、性の捉え方がより厳密になってきた。またマジョリティとは異なった性のあり方を示すセクシュアル・マイノリティの可視化も進み、より多様な個人の生き方が尊重され、男女の二分法では捉えきれない多様性が認められるようになってきている。

心理学において、男女に二分されない個人のあり方は「心理的両性具有」という概念を用いて研究されてきた。両性具有 Androgyny とは、ギリシア語の男 andro と女 gyne を組み合わせた語であり、男性的特性と女性的特性を兼ね備えた状態を意味する。混同されやすい概念に半陰陽と両性愛があるが、半陰陽 hermaphroditism (インターセックス intersex) とは生物学的、身体的特徴として男女両性の性特徴を持つことであり、他方両性愛は、時として男女両性に強い性的魅力を感じることを示す。両性具有が性役割に関する概念であるのに対し、インターセックスは男女一方に還元されない個人のセックスのあり方であり、両性愛は異性愛、同性愛に還元されない性指向の一形態である。また近年、自身の“こころの性別”が男女どちらでもないと自認する X ジェンダーというジェンダー・アイデンティティも提唱されているが、心理的両性具有はそれとも区別される。心理的両性具有は、主に性役割の領域に属する概念であるが、男女の性役割に沿って期待される行動だけに限らず、パーソナリティ特性も含めて「男性的」あるいは「女性的」と呼ばれる性質を共に備えていることを指して用いられている。

社会心理学領域を中心とした実証研究では、その定義の不明確さや仮説と研究成果との不一致をめぐる批判から、心理的両性具有研究は下火になった(三井, 1986)。しかしながら臨床心理学の領域では自己イメージが男女にステレオタイプ化されない現代において、個人の生き方の理解に「心理的両性具有」は有用な概念であるとしばしば指摘されている(河合, 1994; Hong, 2008)。本稿では心理臨床家による指摘と実証研究との乖離について、「心理的両性具有」の概念的定義および操作的定義の相違が、その要因の一つとなっている可能性を考えたい。次節において臨床心理学、特にユング心理学における心理的両性具有の概念的定義の特徴を検討する。続いて Bem (1974) に端を発する実証研究における心理的両性具有の概念的・操作的定義や質

問紙尺度項目の作成方法を総覧する。両者の定義の共通点と相違点を検討した上で、臨床心理学的視点を活かした研究を可能にする「心理的両性具有」の定義を探索し、可能な測定法を模索する。ユング心理学と社会心理学における心理的両性具有研究のレビューを行うことで、男女二分法ではとらえきれない現代の個人のあり方、特に自己イメージのあり方を臨床心理学的視点から理解し研究していくことを可能にする心理的両性具有の定義を模索することが本論文の目的である。また現在、心理的両性具有の概念がクライアント理解に用いられる機会は少ない (Hong, 2008)。その概念を明確にすることによって臨床事例の理解につながることの意義も大きいだろう。

2. ユング心理学における「心理的両性具有」

心理学の領域において、遅くとも 20 世紀の初めからいわゆる男性性・女性性とセックスとの間に必然的関係がないことが指摘されてきた。Freud (1905/2008) は生物学的な「両性性」を主張し、Weininger (1924/1980) は男女いずれにおいても男性性格と女性性格両方を有すると述べた。中でも男女両性具有研究の源流といえるのは、人間の心の変容という観点から男女両性の無意識に存在する異性性を概念化した Jung のアニマ・アニムス論であろう。

Jung (1928/1995) の深層心理学では、個人は意識の主体である自我の働きによって行動や態度を調整するが、それと同時に、個人の行動や態度は無意識（意識されていない欲求や観念、記憶など）の影響を受けていると考える。Jung (1928/1995) によると、個人は社会適応のため周囲の環境、期待に応じてペルソナ（役割や習慣といった適応に必要な態度）を形成する。ペルソナは性役割や職業役割といった外的要請に適応するために形成されたものであるゆえに、内面と外的環境との調整機能を担う自我意識が同一化しやすい。しかしペルソナは自己の一部である社会的役割にすぎず、個人の特性全体を反映するものとはなりえない。アニマやアニムスは自我意識と異質でありながらも無意識的に持つ欲求や特性、機能といった内容の集合であり、一面的になりやすいペルソナと同一化した自我にそうした心的要素を伝える補償という機能を持つ。アニマやアニムスはイメージや現実の人間関係において異性像に投影され、アニマは主にムードによって、アニムスは主に論理的意見によって補償的なメッセージを意識に伝える。こうした投影を意識化し、異性像に投影している内容が自己の一部であることを意識することで、個性化(個人が自分の内的素質に応じた生き方を体現していくこと)の過程が進んでゆくこととなる (Jung, 1928/1995)。

Jung (1956/2000) は個性化の過程を辿る題材として、錬金術の象徴に見られるアニマ・アニムスの変容過程を重視し、男女という対の結合である両性具有を錬金術の最終産物であると考えた。錬金術の文書において、その最終段階は男女が区別なく融合したヘルマプロディートスの状態として描かれているが、Jung (1956/2000) は男女未分化なヘルマプロディートスと男女が分化したうえで結合しているアンドロギュノスを区別した。錬金術の目標態であるアンドロギュノスは、男女両性の原理がそれぞれの特徴を無差別に同化することなく結びつき、男性性と女性性とが混乱することなくバランスを保った状態であるとされる (Jung, 1956/2000)。

以上のような Jung のアニマ・アニムス論は当時の文化背景の中で形成されたものであり、その後フェミニズム運動の影響などによって一部修正され研究者によって様々な見解が示されて

きた。Zinkin (1992) によるとこれらの見解は正統派と修正派とにまとめられる。正統派は男性と女性との本質的違いからアニマ・アニムスそれぞれの性質を探究したものであり、例えば Grinnel (1973) は錬金術の男性像・女性像からアニマ (女性心理) について考察している。一方修正派は、アニマとアニムスがともに両性の中に存在する機能であるとする。Hillman (1985) は女性も男性もアニマとアニムスを持ち、女性像や男性像に投影されたアニマやアニムスと自我意識が関係をもつことによって意識内容を拡充するというアニマ・アニムスの機能を重視した見解を示している。こうした見解を発展させて、河合 (1991) はアニマとアニムスという独立した元型ではなく、両者が一体となった「たましいの元型」があり、意識のあり方を補償する形で男性イメージなり女性イメージなりの姿で表れるという説を主張している。このように修正派のアニマ・アニムス論は、男女の対(syzygy)として対立し合うものが最終的に結合することによってところが全体性を成就していくという考えを特徴としている。ユング心理学では個人の内的な態度について述べているのに対して、現代社会の特徴が服飾のような行動次元に現れているという点で違いがあるものの、男が男らしく、あるいは女が女らしく生きるだけでなく、個人が男らしくも女らしくもなりうる、という修正派のアニマ・アニムス論は、現代の個人のあり方を描写するうえでも参考になる点が多い。

本論文では、男性性・女性性をともに両性を持つと考える修正派の見解の一つであり、アニマ・アニムスに関する論考からさらに踏み込んで心理的両性具有そのものを対象として最も詳細に研究を行った Singer (1976/1981) の『男女両性具有』を取りあげて、心理的両性具有に関するユング心理学的見解を考える。Singer (1976/1981) は、両性具有の重要な側面として、個人の内部で対極的に捉えられている、いわゆる男性性と女性性が統合することとして心理的両性具有を定義し、両性具有とは何なのか、あるいは個人の心の内部でいかに両性具有が体現されるのか、について詳細な検討を行った。創世神話や占星術、道教といった古来の神話や宗教、哲学や、現代のシステム論を参照したうえで、Singer (1976/1981) は男性性・女性性の本質を、パーソナリティ特性の集合ではなく心的エネルギーの流れの方向性と捉えることを提唱した。すなわち男性性とは他者へと関心や愛情といった心的エネルギーを向けようとする機能を指し、女性性とは他者から心的エネルギーを得ようとする機能を言う。Singer (1976/1981) は「個々の人々は男女のいずれの特質をも共に持ち合わせている」(Ⅰ, p.53)と言い、さらに「われわれは男女両性具有的となるのではないのであって、すでに男女両性具有的なのだ」(Ⅱ, p.104)と述べる。つまり、Singer (1976/1981) は男性性・女性性共にあらゆる個人が持つのであり、あらゆる個人が本質的に両性具有的な潜在性を有すると考えるのである。

ただし Singer (1976/1981) は「男女両性具有的なるものは、分割を絶えず乗り越えるために活動する結合という支配的原理を理解し、結合が生命に欠かせないと同様、分割も生命に欠かせないことを知っている。」(Ⅱ, p.186)と述べている。すなわち心理的両性具有は、未分化なままに男性的性質と女性的性質とが現れるのではなく、分化がなされていることを前提とする。男性性・女性性の分化がなされる際、男性が男性的特性のみ持つよう期待され女性的特性を持つことを禁止される、あるいは女性が女性的特性のみ持つよう奨励され男性的特性を抑圧するよう社会的に期待されるといった外的環境の要請が生じ、異性性に関しては自身の性質として受け入れることが困難になり抑圧されることが多くなる。

こうした抑圧を取り払う機能を担うのがアニマ・アニムスである。「アニマ、アニムスという語が『ユング流』に用いられるのであるとすれば、異性的元型を指すものとして、明確に理解されるべきであると思う。なぜなら、それぞれの元型的要素を、力とダイナミズムにあふれるものとするところこそ、この他者性だからである」(Singer, 1976/1981; I, p.278)。アニマ・アニムスは異性を自我に伝えるものであり、内的な異性を意識化して受容することで、個性化の一目標としての心理的両性具有の潜在性が体现されていくとされる。

以上のように、Singer (1976/1981) の理論では心理的両性具有、すなわち男性的特性と女性的特性を共に自我意識に備えることの前段階として、個人の内部で男性的/女性的性質が分化されていることや、その一方に対する抑圧を取り払い結合することといった、個人の自我意識と無意識との力動が重視されている。つまり、Singer (1976/1981) の心理的両性具有には、①男女の性別によって性格特性が個人の内的認識枠組みにおいて分化しており、②同性性のみ身につけなければならないという社会的期待によって男性性・女性性いずれかの抑圧が生じ、③次第にそのような抑圧や、性格特性を性別と結びつけて分離する必要がないことに気づき、性別に拘らずに自分らしい特性を受け入れるという3つの段階が内包されているといえよう。

Singer (1976/1981) は「男女両性具有がどのように現れるかについては、個人の特殊な人格の構造によって異なっていよう」(II, p.104) と述べ、心理的両性具有という観点から理解される事例を数例挙げる。例えば慢性うつ病を患いながら同性愛的な満足を得たいという欲望と、妻と異性愛を結んでいるかのような仮面劇をやっている気持ちとの葛藤に悩む男性は、同性愛的な欲望が「打ち解けた仲間を得るにあたって、受身の立場にいたいという人間の欲望の表現」(II, p. 118) であるという視点でのセラピストとの話し合いから回復していった。この事例について Singer (1976/1981) は当初の悩みを「すっかり男性的意識のシステムに彼ははまりこんでいたので、女性的側面を追い求めることによって彼の苦悩する心は、苦しい葛藤を生み出したのである」とし、そこからの回復について「自分は一面的役割を強いた世の中の犠牲者なのであると考える必要はないことに A 氏が気づいたとき、治癒が始まった。…(中略)…権威的で支配的でありたいという欲望を、彼は断念し始めたのだ」(II, p.123) と考察している。こうした Singer (1976/1981) の例からは、男女二分法に沿って生きることの無理が生じた際に、その二分法を超えて自律的に生きることへの内的・外的要求やその達成過程を考察する視点としての心理的両性具有の有用さを示しているように思われる。Singer (1976/1981) の例でもやはり、異性性の抑圧の必要がないことへの気づきから、性別に拘らずに自分らしい特性を受け入れるという段階が重視されている。現代の心理臨床実践の中でも、セクシュアル・マイノリティなど性の問題に直面するクライアントの多くは、旧来の二分法を超えたあり方を模索することが内的・外的要求により求められる。心理的両性具有は、一見矛盾する複数の自己の性質についての両面性を許容しているかを見る視点として位置付けられるだろう。

3. 実証研究における「心理的両性具有」

臨床研究と同様に 20 世紀の前半から、性役割に関する質問紙尺度を作成する実証研究がなされてきた。例えば 1936 年に Terman & Miles は Attitude-Interest Analysis Test を作成し、Hathaway & McKinley は 1943 年に公表した Minnesota Multiphasic Personality Inventory の下位尺度として

Masculinity-Femininity Scale を作成した。これらは男でなければ女であるとの立場から、性差を基に設定された項目対への評定をもとに、理想化された男性像から理想化された女性像に至る一本の軸の位置づけによって人々の男性性／女性性を測定しようとするものであった。Constantinople (1973) は、尺度相関や因子分析を用いた研究結果から男性性－女性性を一次元の両極として考えるには無理があることや、性差を基に男性性・女性性を規定するのは同語反復であることを論拠に、男性性と女性性とを一次元の両極に位置づける尺度への疑問を示した。

こうした背景のもと Bem (1974) は個人が男性的でも女性的でもある、すなわち両性具有であることが可能であるとの見解を示し、男性性と女性性に関する新たな質問紙尺度を開発することで、心理的両性具有を実証的に測定する研究の端緒を開いた。Bem (1974) は心理的両性具有を状況に応じて適切に男性的でも女性的でもあること、主張的でも従順でもあること、道具的でも表出的でもあることと定義し(表 2), 相互に独立と仮定される男性性尺度と女性性尺度から構成される Bem Sex Role Inventory (BSRI) の開発を行った。BSRI は、アメリカ社会において男性より女性に望ましいとされる肯定的な性格特性語を女性性尺度項目、同様に女性より男性に望ましいとされる肯定的な性格特性語を男性性尺度項目として収集し、女性あるいは男性にとつての望ましさを評定の有意差からその妥当性を検証した (表 3)。BSRI では当初、心理的両性具有は男性性尺度得点と女性性尺度得点間の差が 1 標準偏差未満であることとして操作的に定義されていた (表 1)。

BSRI の開発以降、男性性と女性性をそれぞれ独立と想定した性役割尺度が次々と開発された。その中で、Spence, Helmreich & Stapp (1975) は男性性と女性性両方をともに高程度に持つこととして心理的両性具有を定義し、Bem (1974) の操作的定義では心理的に男性性も女性性も未熟な未分化型と真の両性具有型の区別ができないと指摘した。彼らは Personal Attributes Questionnaire (PAQ) を開発し、男性性尺度得点と女性性尺度得点がそれぞれの中央値よりも高い参加者を両性具有群とする手法による、心理的両性具有の操作的定義を提唱した。BSRI, PAQ の他、Heilbrum (1976) が Adjective Check List を基に作成したものや、Berzins, Welling, Wetter (1978) の PRF ANDRO など、男性性尺度と女性性尺度とを独立の次元と仮定した質問紙尺度が次々と開発され積み重ねられる中で、Spence ら (1975) の提唱した操作的定義の手法は、心理

表1 実証研究における心理的両性具有の操作的定義

Bem(1974)	個々の男性性尺度得点と女性性尺度得点の差の絶対値が1SD未満であること
Bem(1977)	Spence et al. と同様
Spence et al. (1975)	男性性尺度得点と女性性尺度得点それぞれが、各々の中央値よりも高いこと
Heilbrum (1976)	Spence et al. と同様
Berzins, et al. (1978)	Spence et al. と同様
土肥 (1988)	操作的定義は明示していないが特性を男性に望ましいとした評定値と女性に望ましいとした評定値の間の差(性別化得点)を両性具有の指標にすることを提唱。
土肥 (1988)	共分散構造分析において男性性・女性性得点両方に正の影響を与える因子
土肥・廣川 (2004)	Spence et al. と同様
福本 (2008)	尺度の合計得点が両性具有的な生き方をしている程度を示す

表2 実証研究における心理的両性具有の概念的定義

Bem(1974)	ステレオタイプの男性性と女性性との性格特性および社会的望ましさとされる性格特性の混在した状態にある自己概念であり、“男性的”行動、“女性的”行動両方を自由に取ることが出来る。
Spence et al. (1975)	男性的特性と女性的特性の両方を高程度持っていること
Heilbrum (1976)	人が男性的特性と女性的特性両方を発達させて生じる性役割の結果
Berzins, et al. (1978)	文化的に男性的とされる特性と女性的とされる特性を、自己定義や行動に統合すること
土肥 (1988)	男女の性別にかかわらず、男性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性を志向し受容し、かつ女性にとって社会的に望まれるパーソナリティ特性を志向し受容する状態
福本 (2008)	男らしさ・女らしさという性まつわる観念や、無意識のうちに抱いている様々の先入観・価値観などから解放されて、一個の人間として、その人らしく自由に生きること

の両性具有に関する実証研究のほとんどで踏襲された (表 1)。

それと対照的に、心理的両性具有の概念的定義は完全には一致しておらず、表 2 にまとめたように表記に微妙な差がある。男性的特性と女性的特性両方を持っているという点は概ね共通するものの、「ステレオタイプ」(Bem, 1974)、「文化的」(Berzins, et al., 1978) と、社会的に形成されるイメージである点を定義に明示するか否かは研究者によって異なる。また Bem (1974) や Berzins (1978) のみ男性的・女性的性格が混在しているという自己概念に関する点と、それに応じた行動を取るという点両方に言及している。また、Spence et al. (1975) が「高程度持っている」ことと量的な程度によって定義する一方で、Heilbrum (1976) は「男性的特性と女性的特性を発達させて生じる」と発達の目標態として定義し、量に言及していない。男性的特性・女性的特性両方を多く持つ目標態として心理的両性具有が捉えられている点はおおよそ共通しているが、厳密な概念的定義の一致はみないまま尺度の作成が行われてきたといえるだろう。

しかしながら、尺度を構成する男性性・女性性を示す項目の収集手続きは、操作的定義と同様それほど大きな相違は見られない (表 3)。すなわち Bem (1974) の取った手続きが受け継がれ、性役割尺度の項目を基本としながら望ましさと典型性の評定に男女間で差の見られた項目を採用するという手法が取られるようになった。例えば Spence et al. (1975) は Sex Role Stereotype Questionnaire について、大学生に典型的男性・女性がどこに位置するかを評定させて差の見られた項目を採用し、Berzins et al. (1978) も Personality Research Form を基に、性別ごとに望ましさを評定させて差の見られた項目を採用している。実証研究で規定される男性性・女性性は、社会的な望ましさと典型性において男女間で差が見られるパーソナリティ特性の集合であり、男性性とは男性に社会的に望まれる特性の集合、女性性とは女性に社会的に望まれる特性の集合として想定されるものである。

実証研究における心理的両性具有の定義や項目収集法を見てきたが、ユング心理学の見解と比較すると、男性性と女性性に関する自己イメージが意識においてバランスを保っているという概念的定義の大枠は共通しているが、その強調点は大きく異なる。前節にて述べたように、ユング心理学において心理的両性具有は、個人内における対立 (男性性と女性性の分化、異性性の抑圧) が解消されその人らしく生きることが可能になるという点が重視されている。これに対して、実証研究では社会的望ましさの差によって規定された男性性尺度と女性性尺度それぞれの得点がともに高い者を両性具有型とみなす。社会的望ましさの男女差は確認されている

表3 心理的両性具有尺度の項目収集方法

Bem(1974)	アメリカ社会において男性より女性に望ましいとされる肯定的な特性を女性性尺度項目、女性より男性に望ましいとされる肯定的な特性を男性性尺度項目とする。
Spence et al. (1975)	大学生が対となる性格特性間で典型的な男性または女性の示す位置を評定し、評定間で有意差の見られた項目
Heilbrum (1976)	男性的父親に同一化した男子大学生と女性的母親に同一化した女子大学生との間に差が見られた項目から作られたAdjective Check List(Cosentino & Heilbrum, 1964)を基に単次元の男性性・女性性尺度を2つの尺度に分けて作成
Berzins, et al. (1978)	Personality Research Form (Jackson, 1967)の項目から、男性か女性片方に望ましいとされる特性を示す項目
多田 (1980)	主として差異心理学領域の男性的・女性的特性を記述した文献から抜粋された、男性的性格特性、女性的性格特性を示す項目
山口 (1985)	中高生を対象に“大人の男性”、“大人の女性”像を尋ねた回答や大学院生を対象に“母性”、“女性性”、“父性”、“男性性”を尋ねて得られた項目に、既存の男性性・女性性尺度の項目を加えたもの
伊藤 (1986)	大学生を対象に望ましい男性像、望ましい女性像や、男らしさの肯定的側面と否定的側面、女らしさの否定的側面を尋ねて得られた男性的・女性的特性語
土肥 (1988)	既存の(男らしい男性像・女らしい女性像や男性または女性に望ましい特性を項目とする)男性性・女性性尺度の項目から外見的レベルや興味・関心レベルのものを除外した項目
土肥・廣川 (2004)	既存尺度から共同性(女性性)と作動性(男性性)に該当するものを引用して収集した項目
福本 (2008)	著者が概念的定義をもとに独自に作成

が、個人の内部で男性性と女性性が分化しているか否かといった点や、それらが抑圧されているか否かという点は不問にされているといえるだろう。男性性と女性性とが、個人内で対立的に捉えられつつ両方の特性を備えることに抵抗がないという場合と、対立しうるという認知構造がそもそもないまま両方を備えている場合では、実証研究の手続きに従えばどちらも心理的両性具有型とみなされるが、ユング心理学の観点からすれば、後者はむしろ同性性と異性性の次元が未分化であるとも捉えられる。男女両性具有的であることは、男性的特性と女性的特性を意識的態度として広汎に持つことと一致しないのである。

当初、ユング心理学の観点を背景に、Bem (1974) は心理的両性具有者がより適応的であるとの仮説を立てていたが、心理的両性具有よりむしろ男性性と適応との関連を示す研究が報告されるようになり、心理的両性具有研究は下火となった (三井, 1989)。こうした経緯が示唆するように、個人内での男性性と女性性の分化や抑圧といった力動的観点を抜きに心理的両性具有を測定することには無理があると思われる。一般的に質問紙は主として意識水準の観念や態度を測定できるとされる。ユング心理学の強調する、男性性・女性性の対立的認知やそのうち一方の抑圧、その対立を相対化し両特性を自己イメージとして備えるという個人の力動は、長期間にわたって内的に行われる心的プロセスである。従来のように羅列された形容詞を一回きり評定する質問紙を用いて、このプロセスすべてを測定するのは限界がある。質問紙により測定しうる心理的両性具有の程度は、測定時に回答者の意識水準における自己イメージを反映するものに過ぎない。しかしながら、測定時点だけのものに過ぎないとしても、自己イメージに反映される男性性・女性性の分化やその対立を相対化した両面性を許容する程度は、尺度を工夫することで測定しうる可能性がある。わが国における心理的両性具有の研究は多くないものの、このような試みを行った研究がいくつか見られる。次節において、わが国の心理的両性具有研究等を参考にしながら、今後の心理的両性具有研究で取りうる工夫を考えてみたい。

4. 新しい「心理的両性具有」研究に向けて

わが国においても、Bem(1974)に始まる流れを汲み男性性尺度と女性性尺度を独立に設定する性役割尺度の開発は、1980年代を中心に盛んに行なわれた。ただしそれらは、男性性・女性性イメージの一般的内容の検討が関心にある研究(e.g. 山口, 1985; 伊藤, 1986)や、BSRIを邦訳し、心理的両性具有ではなく男性性・女性性と他の心理特性との関連の調べた研究(e.g. 岡本, 1988)がほとんどであり、心理的両性具有の測定法そのものを検討した研究は少ない。しかしながら土肥(1988, 1999)や水澤・中澤・土肥(2008)、福本(2008)は統計的操作や測定法の工夫により心理的両性具有の新たな測定法を提唱している。

土肥(1988)は、BSRIを始めとする従来の男性性・女性性尺度の問題点として「性役割観の多様性、つまり男女に対するパーソナリティ特性の望ましさの認知が個人により様々であることの軽視」を挙げる。そして男性性尺度と女性性尺度の自己評定だけでなく、男性および女性にとつての望ましさを評定させ、それらの差の絶対値の合計を性別化得点として算出することで、個人がパーソナリティ特性を性別化して認知する傾向の程度の測定を試みた。つまり、性別化傾向の低さを心理的両性具有の一指標として取り入れることを提案したのである。また後に土肥(1999)は、Bem(1981)のジェンダー・スキーマ(個人が物事を性別化して捉える認知枠組み)に関する理論を取り上げ、心理的両性具有がジェンダー・スキーマのなさによって規定されるとするモデルを提唱、検証する一連の研究を行っている。その中で土肥(1999)は男性性尺度得点と女性性尺度得点を共に増加させる潜在変数として得られた因子を心理的両性具有性とする操作的定義を行い、性別化得点から算出されるジェンダー・スキーマのなさが心理的両性具有性を高めることを支持する結果を報告している。

土肥の研究は従来の男性性・女性性尺度を用いながら、評定方法や統計的手法の工夫によって心理的両性具有の操作的定義をしようとするものであるが、従来とは違った材料を用いて操作的定義を試みた研究もある。水澤・中澤・土肥(2008)はロールシャッハ・テストのM反応(人間運動反応)の特徴を細分化して男性性・女性性得点とし、両得点が中央値以上の参加者を両性具有型と判断する手続きを取っている。福本(2008)は心理的両性具有を、「男らしさ・女らしさという性にまつわる観念や、無意識のうちに抱いている様々の先入観・価値観などから解き放たれて一個の人間として、その人らしく生きること」として「Androgyny な生き方尺度」の開発を行っている(表2, 3)。これらは投映法によって捉えられる認知スキーマの次元(水澤ら, 2008)、文章評定法によって捉えられる思考の意識的認知の次元(福本, 2008)を反映した新たな測定法として目を引くが、それらの測定法の妥当性を示す理論的根拠に欠ける。

この中でも、土肥(1988)の性別化得点は、男性性と女性性をどの程度対立的なものとして捉えているかの指標となる点で、ユング心理学で重視される男性性・女性性を分化しているか否かという側面を反映しうる指標として注目される。しかし性別化得点の低さからは、男性性と女性性が未分化な段階と対立の不要さを認識した段階とが区別されず、不十分な点も残る。やはりユング心理学の観点を含んだ心理的両性具有の測定法は模索される途上にある。

ところで、土肥(1999)は、両性具有の規定因としてジェンダー・スキーマのなさジェンダー・アイデンティティの確かさを想定している。これはユング心理学的な心理的両性具有で

重視される要素を反映した試みであると考えられ、未分化型と両性具有型はジェンダー・スキーマのなさは共通するもののジェンダー・アイデンティティの確かさに違いが見られるというモデルを提唱し、検証している。しかし土肥 (1999) によると、ジェンダー・スキーマは自己を含めてあらゆる物事を男女に性別化してとらえる認知枠組みを示す概念であり (Bem, 1981)、自己概念におけるジェンダー・スキーマには個人のジェンダー・スキーマがそのまま反映されず、両性具有は自己概念におけるジェンダー・スキーマの程度のみ関連することや、ジェンダー・アイデンティティの確かさと心理的両性具有に有意な関係が見られないことが示されている。したがって、ジェンダー・スキーマやジェンダー・アイデンティティといった他の概念の組み合わせから類推するのではなく、男性性・女性性の分化と抑圧の解消という前提を含んで心理的両性具有を定義する必要があるだろう。ある2つの特性を対極的なものとして捉えながらも (分化)、その両方を有することを認める (抑圧の解消)、というある種力動的なものも含み込んだ形で心理的両性具有を測定する工夫が必要だろう。

この点で示唆的な研究と思われるのが桑原 (1991) の「人格の二面性」についての研究である。桑原 (1991) は個人の人格内に相矛盾する対極的な特性を同時に持つことを「人格の二面性」と呼び、二面性を測定する質問紙尺度である Two-Sided Personality Scale (TSPS) の開発を行った。これは各々の形容詞に自分があてはまる程度を7件法で回答させ、個人の自己イメージを測る尺度であるが、TSPS の最も特徴的な点はその測定形式にある。単なる単極尺度でも、SD 法のように1次元の両極に対を配置するのではなく、図1のように概念的に対極的な意味を示す形容詞を対提示しつつ、単極尺度の形式で各々評定させるのである。こうした対提示は、形容詞の意味をある程度限定するとともに、それらがある種「反対語」であるという「構え」を形成させる (桑原, 1991, p.150)。すなわち1次元両極尺度に落とし込むわけでも、単極尺度として独立に測定するのではなく、対極性を暗に示すことで自身の内に相矛盾する特性が存在する可能性に気付かせる形式を持っている。こうして提示された二面性をどの程度意識化し、抑制せずに受容できるのかは個人によって異なり、自由記述において二面性を意識し受容している人は、二面性得点も高い傾向にあることも報告されている (桑原, 1991)。

桑原 (1991) の研究は個人の人格全体における二面性を主題としたものであるが、「対極性を暗に示しつつ、その対極的な特性をともに持つことを許容する」という二面性の概念は、対立的に捉えていた男性的・女性的特性を同時に持つという深層心理学的意味での心理的両性具有とまさに通じるものであると思われる。TSPS のような対提示という形式を男性性・女性性に適用することで、単なる単極尺度の評定や1次元両極尺度ではとらえきれず、従来の実証研究

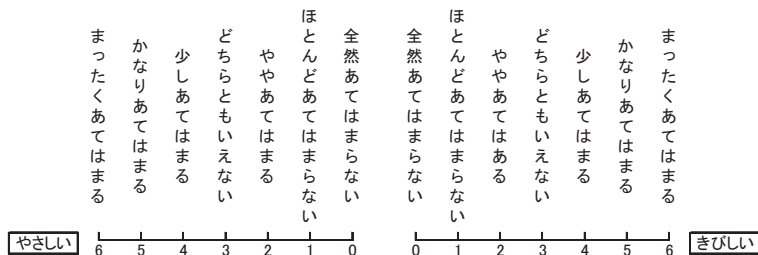


図1 TSPSの測定形式 (桑原, 1991)

からそぎ落とされてきた心理的両性具有の力動的側面を反映させることができるかもしれない。また桑原 (1991) は、対となる形容詞の双方に最高得点を付けることを最も二面的な状態として捉え、最高得点と個々の評定値からプロットされる点との距離から、二面性の程度を数量化して表すことも試みている。実際の適用方法は改めて検討する必要があるが、項目の最初に「男性らしい」「女性らしい」の対を提示して男女二分法を意識させつつ、既存の男性性尺度・女性性尺度に沿った項目を提示し二面性の程度を数量化して測定することで、従来実証研究では「型」としてのみ扱っていた心理的両性具有を、男性性・女性性に関する二面性の程度として数量的に扱うことへの可能性にもつながると考えられる。

5. まとめと課題

ユング心理学において個人が男性性と女性性をともに自身のものとして意識化するという過程が重視されるように、個人の心の変容プロセスの理解に心理的両性具有の概念は有用であると考えられる (Hong, 2008)。特に丹念に心理的両性具有の研究を行った Singer (1976/1981) の論考においては、①男女の性別によって性格特性が個人内で区別され、②社会的期待によって男性性もしくは女性性いずれかの抑圧が生じるが、③次第にそのような抑圧や、性格特性を性別と結びつけて分離する必要がないことに気づき、性別に拘らずに「自分らしい」特性を受け入れ、男性性・女性性両方を自身の特性として受け入れるという3つの段階を含んだ形で心理的両性具有を理解することが重視されていた。性が男女の二分法で捉えきれなくなっている現代において、男女二分法を超えた自律性を捉える心理的両性具有という視点の意義は大きいだろう。心理的両性具有の測定法を洗練させることで、心理臨床実践において個人の生き方の自由度を見る視点をより洗練させていくことにもつながるかもしれない。

しかしこれまでの実証研究は、①のような男性性・女性性に関する内的準拠枠の個人差を捨象して扱ってきた。それによって②、③へと至るプロセスも無視することとなり、単に広汎に男性性・女性性を有することとして心理的両性具有を扱わざるをえなくなった。したがって、臨床的理解につながる視点として心理的両性具有を扱うには、より包括的な心理的両性具有の定義と測定法が必要となるだろう。つまり、男性性・女性性が個人によっては対立的に捉えられうること、しかし同時に男性性・女性性両方を持つことも可能であること、という2点を含んだ形で心理的両性具有を測定できる方法を確立させていくことが、今後の心理的両性具有研究における課題であると考えられる。そのためには水沢ら (2008) のような投射法を用いて無意識レベルでの葛藤や抑圧を推測したり、桑原 (1991) の TSPS のような工夫を質問紙尺度に加えることで男女二分法を超えた性役割に関する自己イメージの二面性の程度を推測したりする測定方法が考えられる。特に後者によって、意識と無意識とにわたる心理的両性具有の力動的なプロセスのうち、意識レベルでの二面性の程度について測定できるかもしれない。

本論文ではユング心理学における広大なアニマ・アニムス論すべてを扱えたわけではない。両性具有はアニマやアニムスの概念を基に発展した概念であるため、今後はこれらを含めて、個人の性役割をめぐる心の在り様を理解していく理論枠組みを整えていく必要があるだろう。また第3節で述べたように質問紙尺度の洗練だけで、心理的両性具有の経時的プロセスを測定できるわけではない。縦断的測定など、個人の心の通時的変容を踏まえて理論や測定法を洗練

させていくことは今後の課題である。

謝辞

本論文の執筆にあたって教育学研究科臨床心理実践学講座の松下姫歌准教授より非常に熱心なご指導をいただきました。心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Bem, S. L. (1974). The Measurement of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Bem, S.L. (1975). Sex Role Adaptability: One Consequence of Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 155-162.
- Bem, S.L. (1977). On the Utility of Alternative Procedure for Assessing Psychological Androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **45**, 196-205.
- Bem, S.L. (1981). Gender Schema Theory: A Cognitive Account of Sex Typing. *Psychological Review*, **88**, 354-364.
- Bem, S.L., Martyna, W. & Watson, C. (1976). Sex Typing and Androgyny: Further explorations of the Expressive Domain. *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 1016-1023.
- Berzins, J.W., Welling, M. & Wetter, R. (1978). A New Measure of Psychological Androgyny Based on the Personality Research Form. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **46**, 126-138.
- Constantinople, A. (1973). Masculinity-Femininity: An Exception to a Famous Dictum? *Psychological Bulletin*, **80**, 389-407.
- 土肥伊都子(1988). 男女両性具有に関する研究 ―アンドロジニー・スケールと性別化得点―. 関西学院大学社会学部紀要, **57**, 89-97.
- 土肥伊都子 (1999). ジェンダーに関する自己概念の研究 ―男性性・女性性の規定因とその機能―, 多賀出版.
- 土肥伊都子・廣澤空美 (2004). 共同性・作動性尺度 (CAS)の作成と構成概念妥当性の検討 ―ジェンダー・パーソナリティの賛否両側面の測定―. 心理学研究, **75**, 420-427.
- Freud, S. (1905). Three Essays on the Theory of Sexuality. (フロイト, S. 渡邊俊之訳 (2009). 性欲論三篇 フロイト全集 6. 岩波書店.)
- 福本 俊 (2008). Androgyny な生き方尺度の提案. 日本家政学会誌, **59**, 805-811.
- Grinnel, R. (1973). *Alchemy in a Modern Woman: A Study in the Contrasexual Archetype*. Dallas: Spring.
- Heilbrun, A. B. (1976). Measurement of Masculine and Feminine Sex Role Identities as Independent Dimensions. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **44**, 183-190.
- Hillman, J. (1985). *Anima: An Anatomy of a Personified Notion*. Dallas: Spring.
- Hong, G.H.(2008). The Concept of Androgyny and Its Application in Clinical and Counseling Psychology: A literature review. *Kyushu University Psychological Research*, **9**, 171-178.

- 伊藤裕子(1978). 性役割の評価に関する研究. 教育心理学研究, **26**, 1-11.
- Jung, C.G. (1928). Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewussten (ユング, C.G. 松代洋一・渡辺学訳 (1995). 自我と無意識. 第三文明社.
- Jung, C.G. (1956). *Mysterium Coniunctionis: Untersuchungen über die Trennung und Zusammensetzung der seelischen Gegensätze in der Alchemie* (ユング, C.G. 池田紘一訳 (2000). 結合の神秘. 人文書院.
- 河合隼雄 (1991). とりかへばや, 男と女. 新潮社.
- 河合隼雄 (1994). ユニセックス時代の「男らしさ 女らしさ」. 日本社会とジェンダー, 岩波書店.
- 桑原知子 (1991). 人格の二面性について 風間書房.
- 水澤慶緒里・中澤 清・土肥伊都子 (2008). 投映法から見たジェンダー・パーソナリティの研究 ―共同性・作動性尺度とロールシャッハ・テストを用いて― 日本心理学会第72回大会発表集, 1430.
- 三井宏隆 (1986). ジェンダーの社会心理学 三田哲学会紀要, **83**, 287-316.
- 岡本浩一 (1988). 独自性欲求の男女差に関する基礎研究 社会心理学研究, **3**, 56-62.
- Samuels, A., Shorter, B. & Plaut, A. (1986). *A Critical Dictionary of Jungian Analysis*. London: Routledge and Kegan Paul.
- Singer, J. (2000) *Androgyny: The Opposites Within*. (シンガー, J. 藤瀬恭子訳 (1981). 男女両性具有 I・II, 人文書院.)
- Spence, J., Helmreich, R. & Stapp, J. (1975). Ratings of Self and Peers on Sex Role Attributes and Their Relation to Self-Esteem and Conceptions of Masculinity and Femininity. *Journal of Personality and Social Psychology*, **32**, 29-39.
- 多田健治 (1974). パーソナリティに於ける男女性の次元の検討. 金沢大学教育学部紀要, **23**, 205-218.
- Weininger, O. (1924). *Geschlecht und Charakter*. (ヴァイニンガー, O. 村上啓夫訳 (1936). 性と性格 春秋文庫, 第3分 春秋社.)
- 山口素子(1985). 男性性, 女性性の2側面についての検討. 心理学研究, **56**, 215-221.
- Zinkin, L. (1992). *Anima and Animus: an Interpersonal View*. Schwartz-Salant, N. & Stein, M. eds. *Gender and Soul in Psychotherapy*. Wilmette, IL: Chiron Publications.

(臨床心理学コース 博士後期課程1回生)

(受稿 2018 年 8 月 31 日, 改稿 2018 年 11 月 21 日, 受理 2018 年 12 月 21 日)

「心理的両性具有」の概念および測定法に関する文献展望

大澤 尚也

男性性と女性性とを共に備えることを示す「心理的両性具有」の研究は、個人の性の多様性が可視化されてきた現代において、個人の生き方の理解に重要な概念となりうる。ユング心理学においては①男性性と女性性が個人内で区別され、②社会的期待によって男性性もしくは女性性の抑圧が生じるが、③性別に拘らずに「自分らしい」特性を受け入れるという3つの段階を含んだ形で心理的両性具有を理解することが重視されてきた。一方実証研究では、男性性・女性性に関する内的準拠の個人差が捨象され、単に広汎に男性性・女性性を有することとして心理的両性具有を扱うことで、仮説と異なる結果が示されたことで、研究自体が下火となった。男性性・女性性を対立的に捉えうるが、男性性・女性性両方を持つことも可能である、というある種逆説を含みながら心理的両性具有を測定できる方法を確立させていくことが、今後の心理的両性具有研究における課題であると考えられる。

On the Concept and Measurement of “Psychological Androgyny”: A Literature Review

OSAWA Naoya

The concept of psychological androgyny, i.e., being in possession of both masculine and feminine personality traits, is important to understand individuals' ways of living in the modern era where there is recognition of sexual diversity. Jungian psychology emphasizes the inner process of individuals, including: 1) differentiation of masculinity and femininity; 2) repression of masculine or feminine nature based on social expectations; and 3) acceptance of one's own traits regardless of gender. On the other hand, empirical research has treated psychological androgyny simply as a state of possessing high levels of both masculinity and femininity, and has ignored individual differences in the internal frameworks that define masculinity and femininity. Consequently, such research falls short when testing hypotheses based on such a restrictive definition of androgyny. Future research on psychological androgyny would require the establishment of a method for measurement of psychological androgyny reflecting its paradoxical nature; the differentiation and possession of both masculine and feminine psychological traits.

キーワード： 心理的両性具有, 男性性・女性性, アニマ・アニムス

Keywords: Psychological Androgyny, Masculinity and Femininity, Anima and Animus